

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1401 集

H I E
比 恵 88

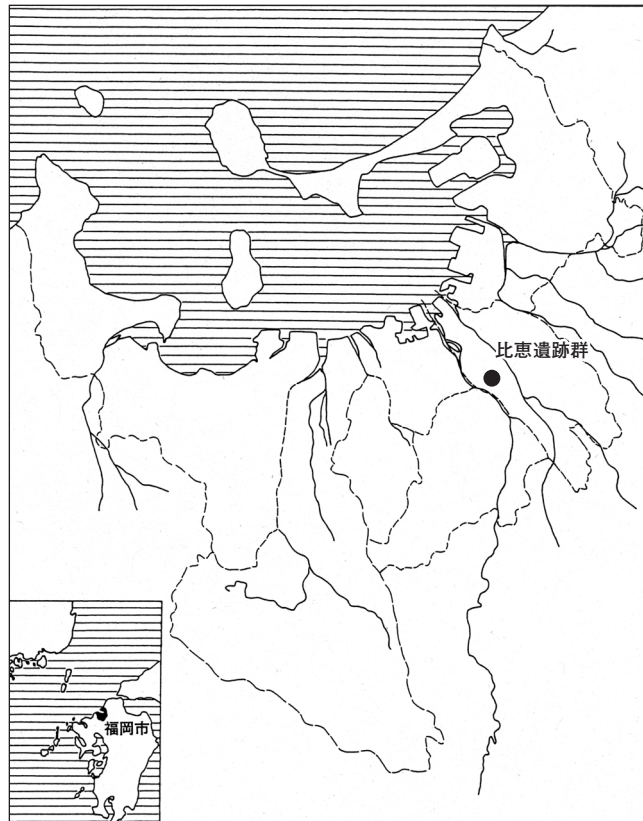
—比恵遺跡群第151次調査報告—

2 0 2 0

福岡市教育委員会

H I E
比 恵 88

—比恵遺跡群第151次調査報告—



遺跡略号 HIE-151
調査番号 1738

2020
福岡市教育委員会

序

玄界灘に面する港湾都市福岡は、太古の昔から大陸との交流の窓口として栄え、それを示す多数の埋蔵文化財が残っています。しかしこれらの埋蔵文化財は開発の進展に伴って、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市では工事に先立って発掘調査を実施し、後世にその成果と意義を伝えるべく、努めて参りました。

本書は、店舗建設に伴い博多区博多駅南5丁目地内で実施した比恵遺跡群第151次調査の成果を取めたものです。

今回の調査では、弥生時代の甕棺墓、井戸、竪穴建物、掘立柱建物、溝などを検出しました。

本書を通じて調査成果がより多くの方に共有され、活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、株式会社サンコーホールディングス様をはじめとする関係者の方々にはご理解と多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例言

1. 本書は、店舗建設に伴い福岡市博多区博多駅南5丁目地内において実施した比恵遺跡群第151次調査の報告である。
2. 検出遺構はピットとそれ以外のものに分け、それぞれ通し番号とし、以下の略号を付した。
ピット SP 掘立柱建物 SB 竪穴建物 SC 溝 SD 土坑 SK
井戸 SE
3. 遺構の実測は木下博文が行った。
4. 遺物の実測・採拓は山崎賀代子が行った。
5. 遺構・遺物の写真撮影は木下博文が行った。
6. 製図は山崎賀代子が行った。
7. 本書で使用した方位は磁北で、真北より6°20′西偏する。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
9. 本書の執筆・編集は木下博文が行った。

調査番号 1738	遺跡略号 HIE-151	分布地図番号 37 東光寺
所在地 博多区博多駅南5丁目62-3他15筆	調査面積 730㎡	
調査期間 2018.3.12~5.28		

本文目次

第1章 はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
第2章 遺跡の立地と環境	2
第3章 調査の記録	6
1 調査の概要	6
2 遺構と遺物	6
甕棺墓	
竪穴建物	
井戸	
溝	
土坑	
掘立柱建物	
ピットおよびその他出土の遺物	
3 まとめ	15
図版1～10	16～25

挿図目次

図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)	2
図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)	3
図3 調査区位置図 (S = 1 / 300)	4
図4 調査区平面図 (S = 1 / 200)	5
図5 ST05および出土遺物実測図 (S = 1 / 20、1 / 4)	7
図6 SC01・03・04実測図 (S = 1 / 60)	8
図7 竪穴建物出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 4)	9
図8 SE02および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)	10
図9 SD07・11および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)	11
図10 SK06・08実測図 (S = 1 / 40)	12
図11 SB10・12実測図 (S = 1 / 80)	13
図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)	14
図13 かく乱出土遺物実測図 (S = 1 / 2)	15

図版目次

図版1 1区全景 (南西から) 2区全景 (南西から)	16
図版2 ST05 (東から) ST05 (北から)	17
図版3 SC01 (北西から) SC01遺物出土状況 (北西から)	18
図版4 SC03 (南から) SC04 (西から)	19
図版5 SE02 (北西から) SD07 (北から)	20
図版6 SD11 (北から) SK06 (北東から)	21
図版7 SK08 (北東から) SB10 (南西から)	22
図版8 SB12 (南から)	23
図版9 出土遺物1	24
図版10 出土遺物2	25

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、平成29（2017）年10月13日付で大和ハウス工業株式会社福岡支社より博多区博多駅南5丁目62-3他15筆地内における埋蔵文化財の有無について照会を受けた（事前審査番号29-2-626）。同地は比恵遺跡群の範囲内であることから、同年11月14日、12月1日に試掘調査を実施し、地表面下25～40cmで遺構を確認した。

今回は店舗建設であり、その基礎工事内容は残存遺構への影響を及ぼすものであることから、発掘調査を実施することとなった。

本調査は、平成30（2018）年3月12日にユニットハウス・仮設トイレの設置・発掘機材の搬入などの条件整備を行い、翌13日にバックホウによる表土剥ぎより着手した。3月14日より人力による掘り下げを開始、順次遺構の検出・精査・実測を進め、平成30（2018）年5月28日に終了した。

2 調査体制

調査委託	有限会社サンコーリース（現 株式会社サンコーホールディングス）
調査主体	福岡市教育委員会 （発掘調査 平成29・30年度 資料整理 平成31年・令和元年度）
調査総括	経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課長 常松幹雄（平成29年度） 文化財活用部埋蔵文化財課長 大庭康時（平成30年度） 菅波正人（平成31年・令和元年度） 同課調査第1係長 吉武学（平成29～31年・令和元年度）
庶務	文化財保護課管理調整係 松尾智仁（平成29年度） 文化財活用課管理調整係 松尾智仁（平成30年度） 松原加奈枝（平成31年・令和元年度）
事前審査	埋蔵文化財課事前審査係長 本田浩二郎（平成29～31年・令和元年度） 同課事前審査係主任文化財主事 池田祐司（平成29年度） 田上勇一郎（平成30～31年・令和元年度） 同課事前審査係 中尾祐太（平成29～30年度） 朝岡俊也（平成31年・令和元年度）
調査担当	埋蔵文化財課調査第1係 木下博文

第2章 遺跡の立地と環境

福岡平野中央を南東から北西へと流れる御笠川と那珂川に挟まれた地域には、標高5～7m程度の段丘が形成されている。この段丘は阿蘇山火砕流を起源とする白色の八女粘土、赤褐色・橙色の鳥栖ロームを基盤とする。比恵遺跡群はこの段丘上に立地する弥生時代から中世までの複合遺跡である。南側に続く段丘上に同時期の那珂遺跡群が展開しており、一連のものと考えられている。弥生時代中期に前漢鏡を伴う大型甕棺墓やガラス・青銅器鑄造工房が営まれる須玖遺跡群の所在する春日丘陵を基点とし、比恵遺跡群まで連綿と遺跡が展開することから、奴国の中樞の移動が考えられており、弥生時代～古墳時代初頭における福岡平野の中樞を構成する。

後には『日本書紀』宣化天皇元（536）年条に見える那津官家の所在地が想定されるなど、古墳時代後期～終末期には大和政権にとっても枢要の地となっているとみられている。

今回の調査地点は、遺跡の北西端部に位置する。道路を挟んで南東に隣接する区画では、三本柱の柵列で囲まれた倉庫とみられる掘立柱建物群が検出されている（8次・72次）。この遺構群が那津官家と関連するものとみられ、国史跡に指定されている。竹下通りを挟んで、この区画の南西側では、倉庫群の続きが確認されている（125次）。しかし8次調査の北西端に隣接する60次調査では、

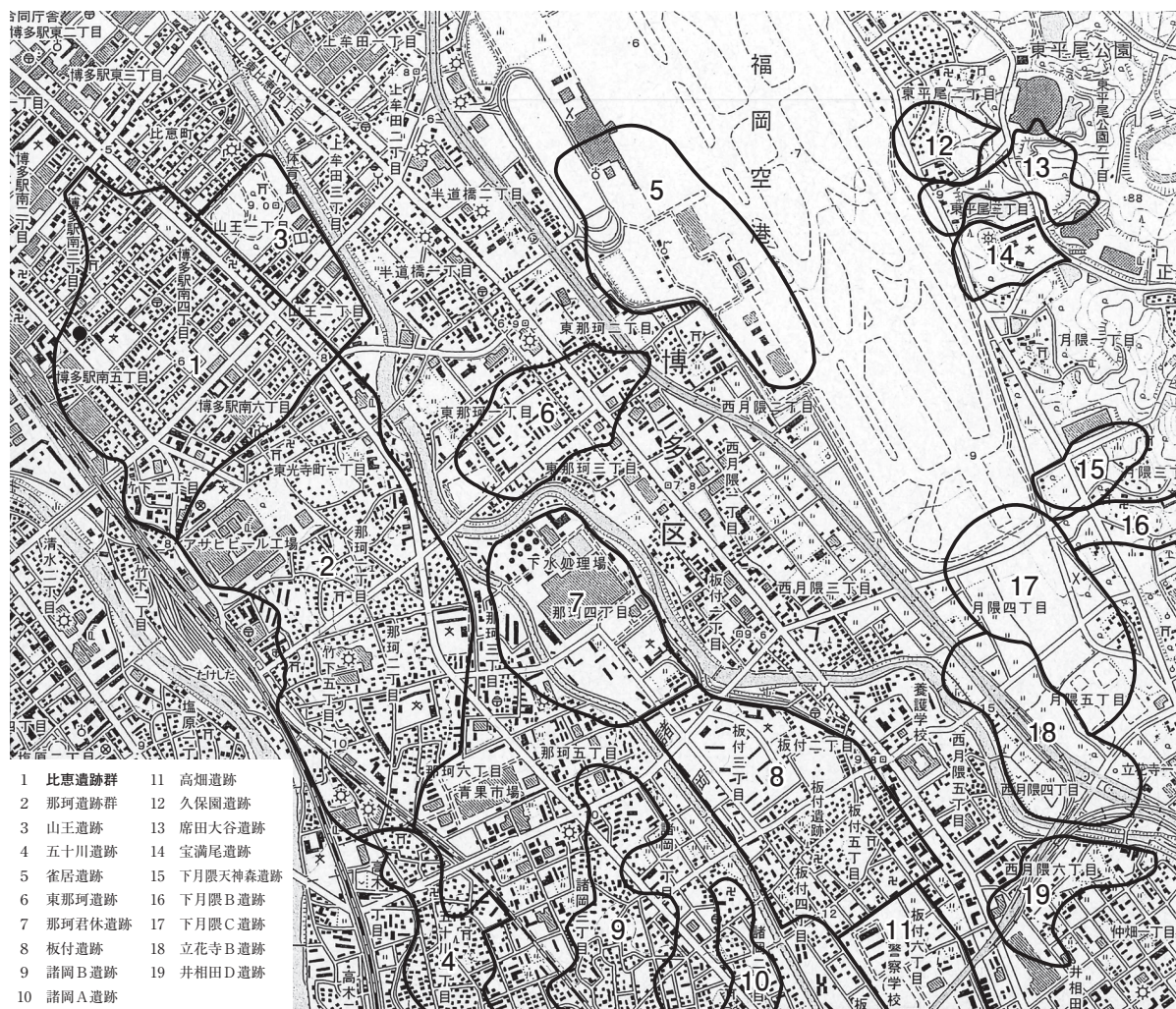


図1 遺跡の位置 (S = 1 / 25000)

倉庫群・柵状遺構に関連する遺構が全く検出されておらず、8次調査地点より南東側に収まることが判明している。

さらに時期を遡ると、69次・101次では弥生時代前期の貯蔵穴群、60次では松菊里型円形住居や方形住居からなる弥生時代中期～後期にかけての堅穴住居群、甕棺墓7基と土壙墓2基からなる弥生時代中期前半～中頃の墓群、弥生時代後期～終末期の井戸が検出されている。この種の遺構は、8次・72次・125次調査地点にも広がっている。その分布状況から、住居・貯蔵穴・墓がそれぞれまとまりを持って重複せず、時期ごとに変遷している様相がうかがわれる。

以上のような周辺地域の調査内容から、より台地端に位置する今回の調査地点において、弥生時代全期間における土地利用の変遷がいかなるものであるか、古墳時代後期の大規模倉庫群の範囲外としてどのような様相となっているのかといったことが、明らかにすべき課題であった。



図2 調査地点位置図 (S = 1 / 2000)

8330	8次	0009	72次	1138	125次
9668	60次	9834	66次	9769	64次
0480	97次	0526	101次	0628	107次
9361	52次	9925	69次	0644	109次
9245	47次	9772	65次	0570	104次
0121	75次				

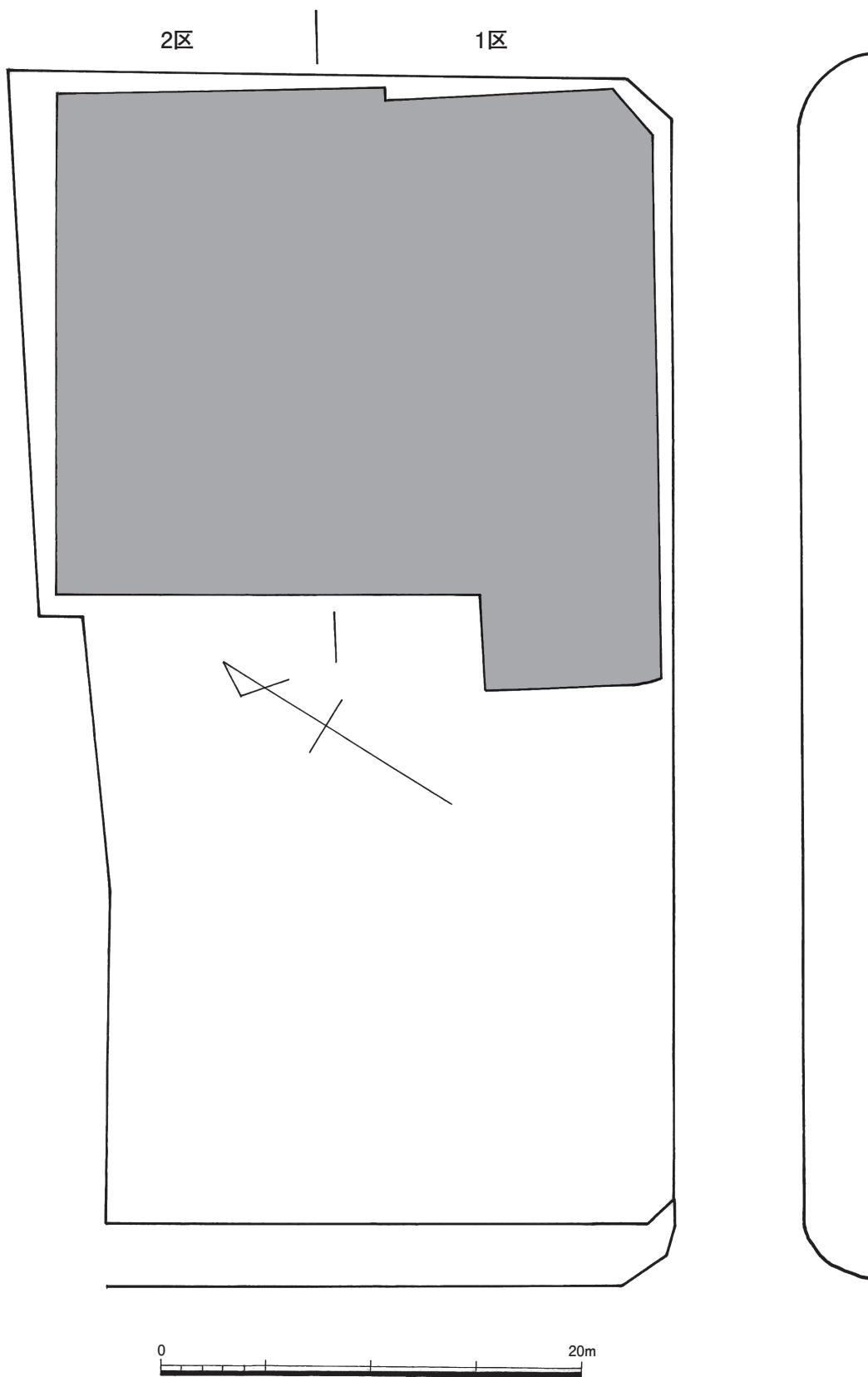


図3 調査区位置図 (S = 1 / 3 0 0)

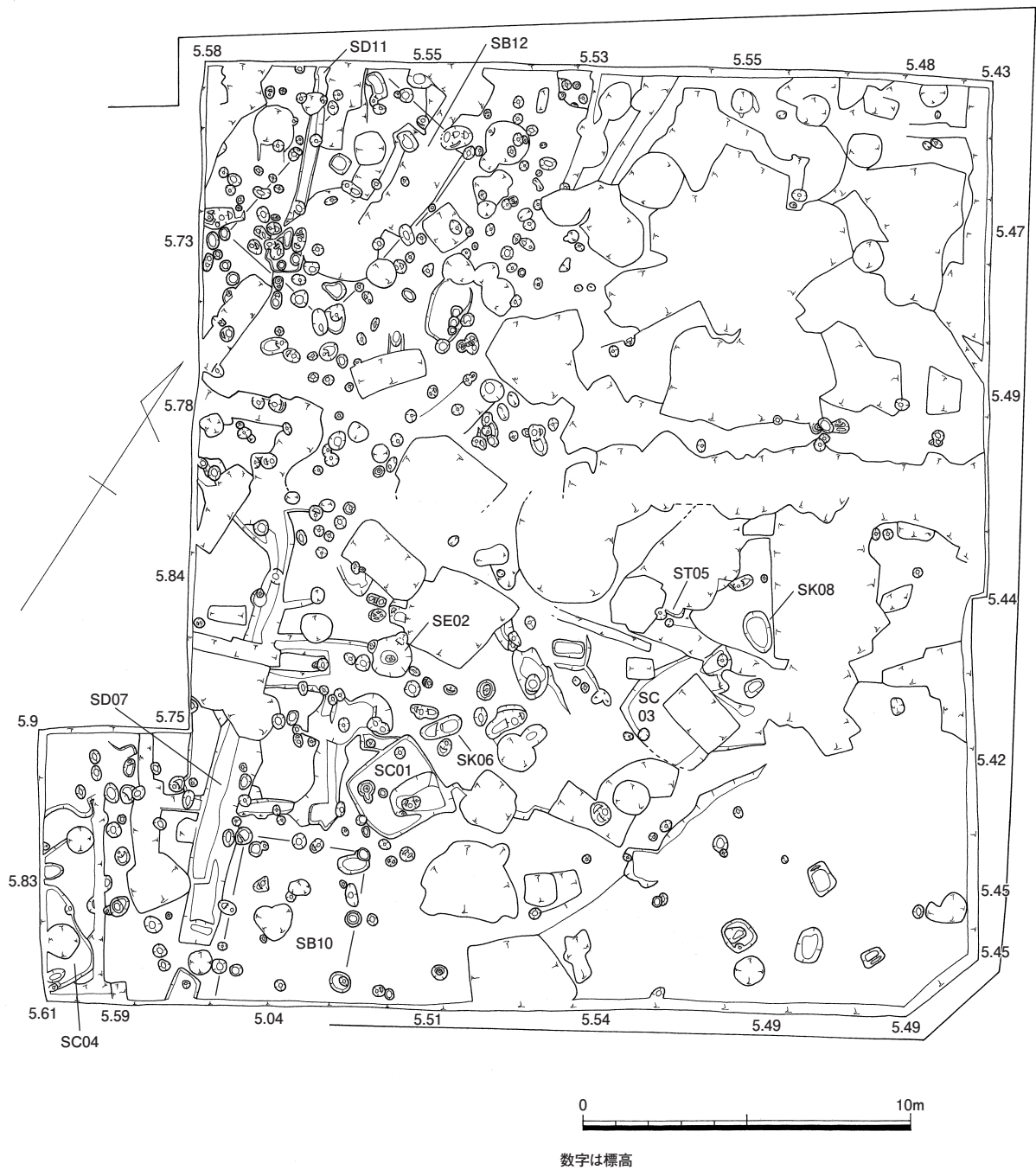


図4 調査区平面図 (S = 1 / 200)

8次	柳沢一男編『比恵遺跡』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第116集	1985
72次	長家伸編『比恵29』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第663集	2001
125次	荒牧宏行編『比恵66』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第1237集	2014
60次	大庭康時編『比恵26』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第562集	1998
69次	長家伸編『比恵30』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第671集	2001
101次	吉留秀敏編『比恵48』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第957集	2007

第3章 調査の記録

1 調査の概要

本調査地点は、遺跡の北西端部に位置し、那津官家推定地として国史跡に指定されている8次・72次調査地点の北西隣の区画にあたる。現地表の標高5.4～5.9mである。

調査対象範囲である店舗建設予定範囲を、南半と北半の2回に分け、南半から調査を行った。南半を1区、北半を2区とする。

遺構は現地表面下25～40cmの鳥栖ローム層上面で検出した。遺構面は既存建物の基礎や重機の爪痕などの攪乱が激しい状況であったが、1区では甕棺墓1、井戸1、方形竪穴建物3、掘立柱建物1、溝1、2区では掘立柱建物1、溝1を検出した。遺構の密度は、調査区の西半が比較的高く、東半は低い傾向にある。出土遺物量はコンテナ5箱分である。

遺構はピットとそれ以外に分け、それぞれ通し番号とした。

2 遺構と遺物

甕棺墓

ST05（図5、図版2）

1区北部で検出した。周囲は攪乱で削平されており、辛うじて残存している状況であった。墓壙の長さ0.6m、深さ0.2m、甕棺の残存長0.43mで、単棺である。甕棺は弥生時代中期初頭の金海式である。

出土遺物（図5、図版9）

1は金海式甕棺である。復元口径48.6cm、残存高43.5cm、にぶい橙色を呈し、胎土に5mm以下の石英・長石・黒雲母粒を多量に含む。調整について、外面は口縁端部に刻み目、頸部・胴部に3本セットの沈線を施し、器表面を斜めに板状のヘラ状工具でなでている。内面は口縁部直下をなで、指抑えし、胴部との境に1本の沈線を施す。胴部は横ハケを施すものの、摩滅が著しい。

竪穴建物

SC01（図6、図版3）

1区中央、SE02の南東で検出した。2.35×2.55mの方形で、深さ0.1～0.15mである。

出土遺物（図7、図版9）

4は弥生土器の壺である。残存高46.4cm、にぶい黄橙色を呈し、内外面にハケ目を施す。

SC03（図6、図版4）

1区の東寄りで検出した。攪乱で東半がかなり削平されている。深さ0.1mで1辺は3mほどに復元できる。北辺・南辺の中央に建物の外側へ斜め方向に穿ったピットが各1ヶ所あり、屋根を支える柱穴か。

SC04（図6、図版4）

1区南西隅部で検出した。1辺3m、深さ0.1mの方形で、調査区南西外側に延びる。東辺の床面直上に炭・焼土の散布が認められた。それに近接するピットから弥生時代中期の甕の鋤形口縁部が出土した。

出土遺物（図7、図版9）

2・3は弥生土器の甕である。3はSP66の出土。

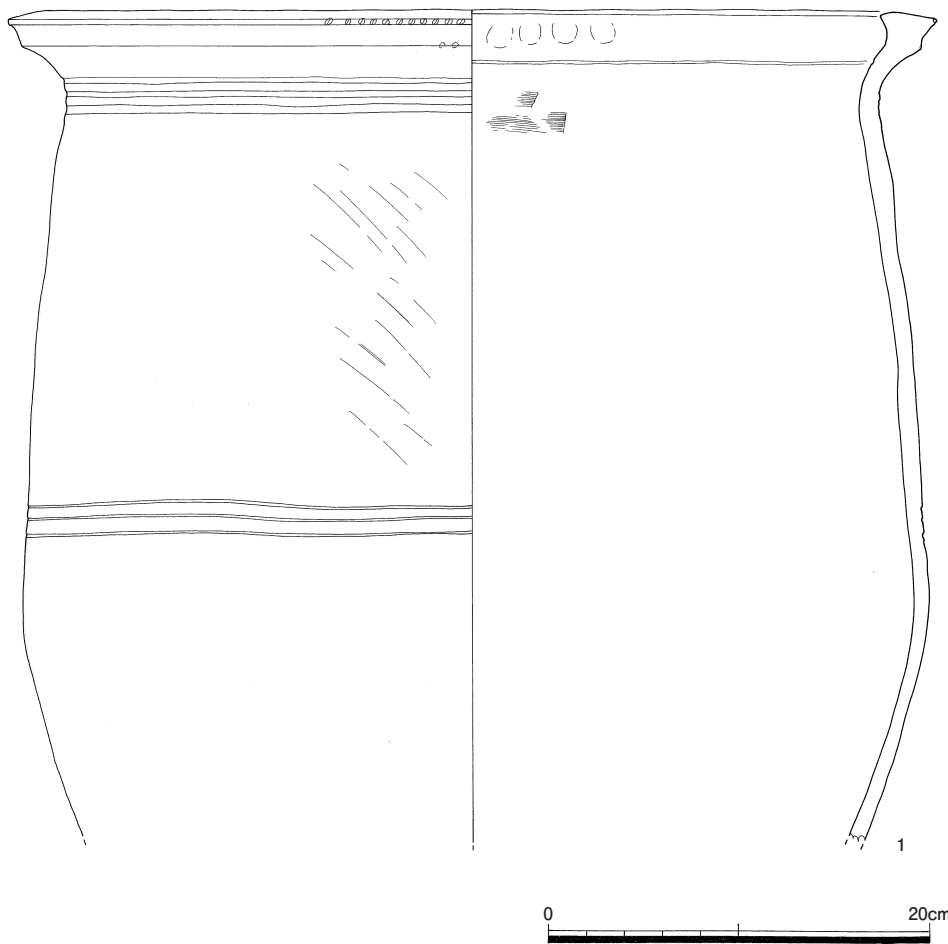
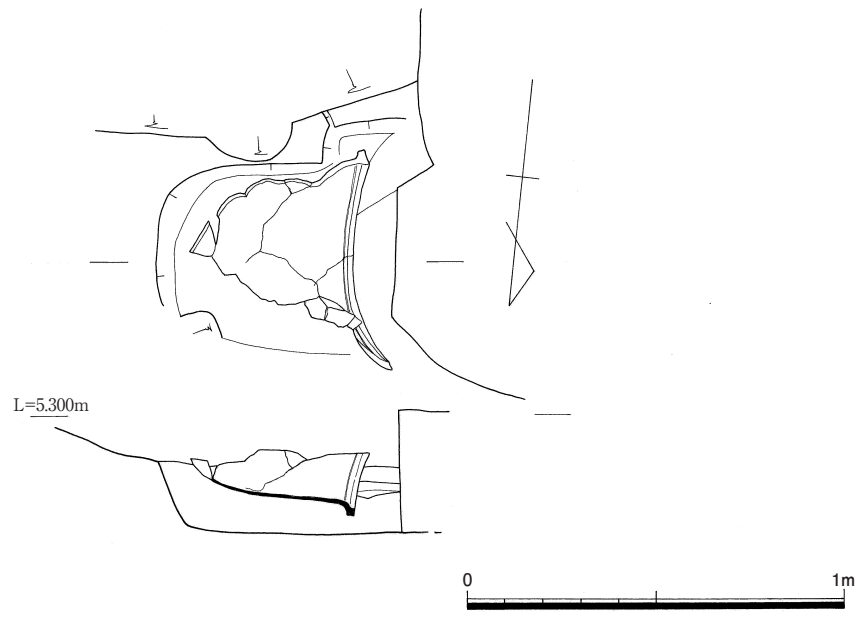


図5 ST05および出土遺物実測図 (S = 1/20、1/4)

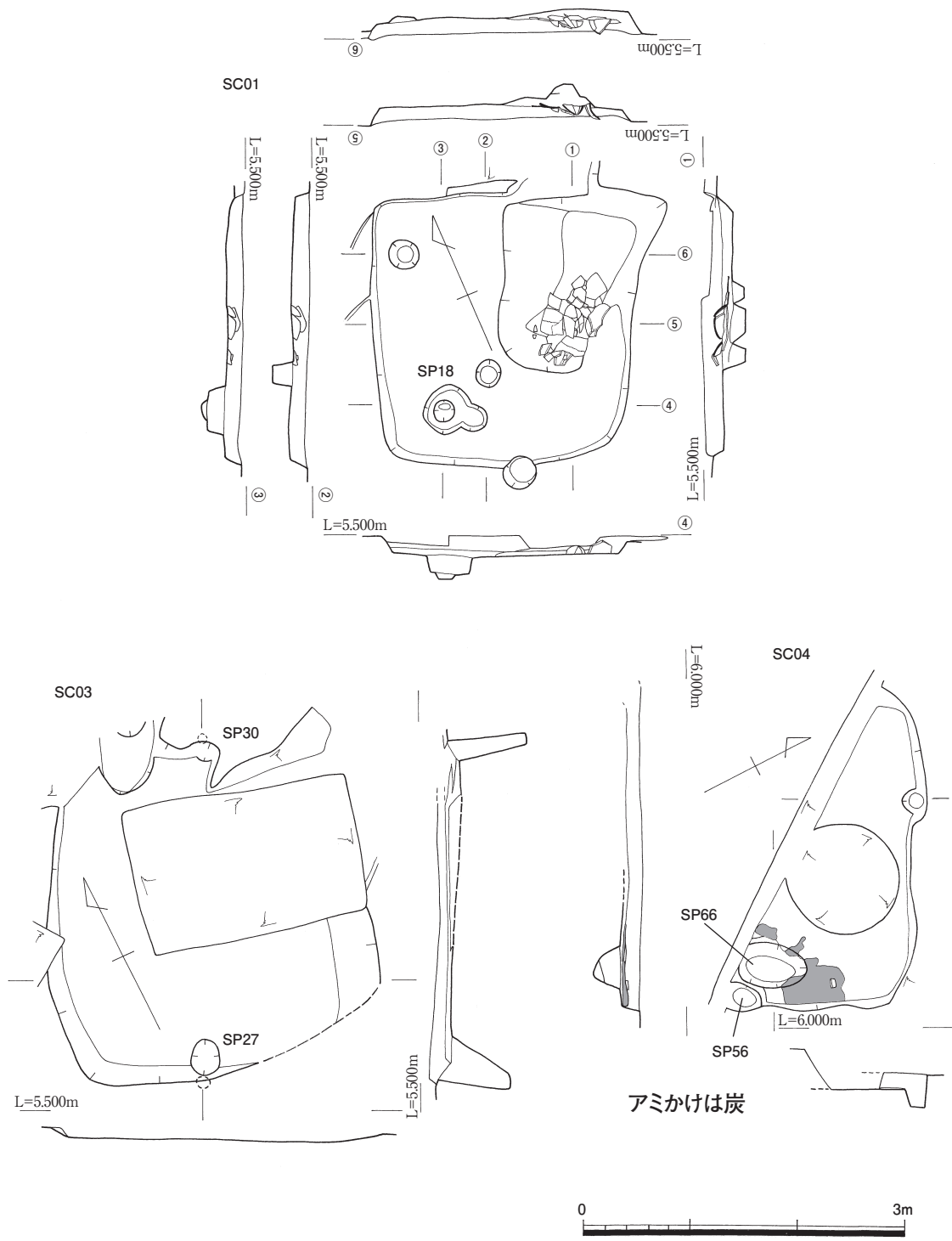


図6 SC01・03・04実測図 (S = 1 / 60)

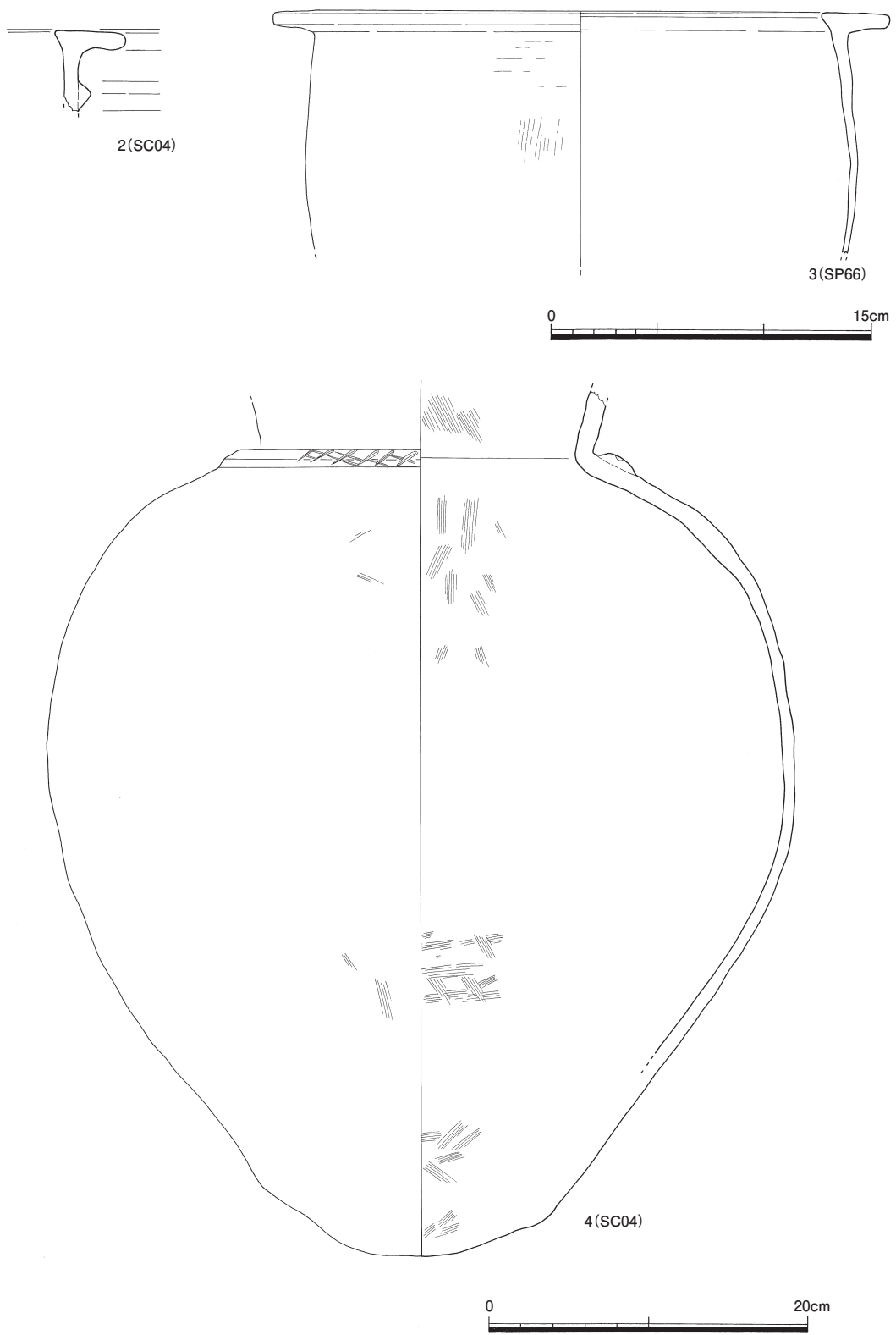


图7 竖穴建物出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 4)

井戸

SE02 (図8、図版5)

1区中央で検出した。径1.2m、深さ1.5mの円形、素掘りである。底部に向かって徐々に掘りすばまっている。白色の八女粘土層まで掘り抜かれておらず、湧水はあるもの数十cm程度である。埋め戻し・反転作業時に重機で底部を掘り下げたところ、井戸検出面から2.5m下で八女粘土層に達した。井戸底から1m下ということになる。埋土は暗褐色粘質土で、出土遺物量は少ないが、中層よりやや下の壁際で完形の壺(図8-6) 1個体が出土した。弥生時代後期後半に属す。

出土遺物(図8、図版10)

5は弥生土器の鉢、6・7は壺である。5は復元口径13.4cm、器高7.5cm、明赤褐色を呈し、全体になでを施す。6は口径13.2cm、器高15.0cm、上半はにぶい橙色、下半は黒褐色ないし灰褐色を呈し、口縁部は内外面ともに横なで、外面に粗い縦ハケ、内面に削りを施す。内面に粘土の継ぎ目が見られる。7は復元口径22.6cm、残存高5.5cm、橙色を呈し、全体になでを施す。

溝

SD07 (図9、図版5)

1区西部で検出した。検出長13m、深さ0.1~0.3m、南東から北西に走る。埋土は薄い茶褐色土で、SB10のピットを切る。検出遺構の中では最も新しいものとみられる。中世か。

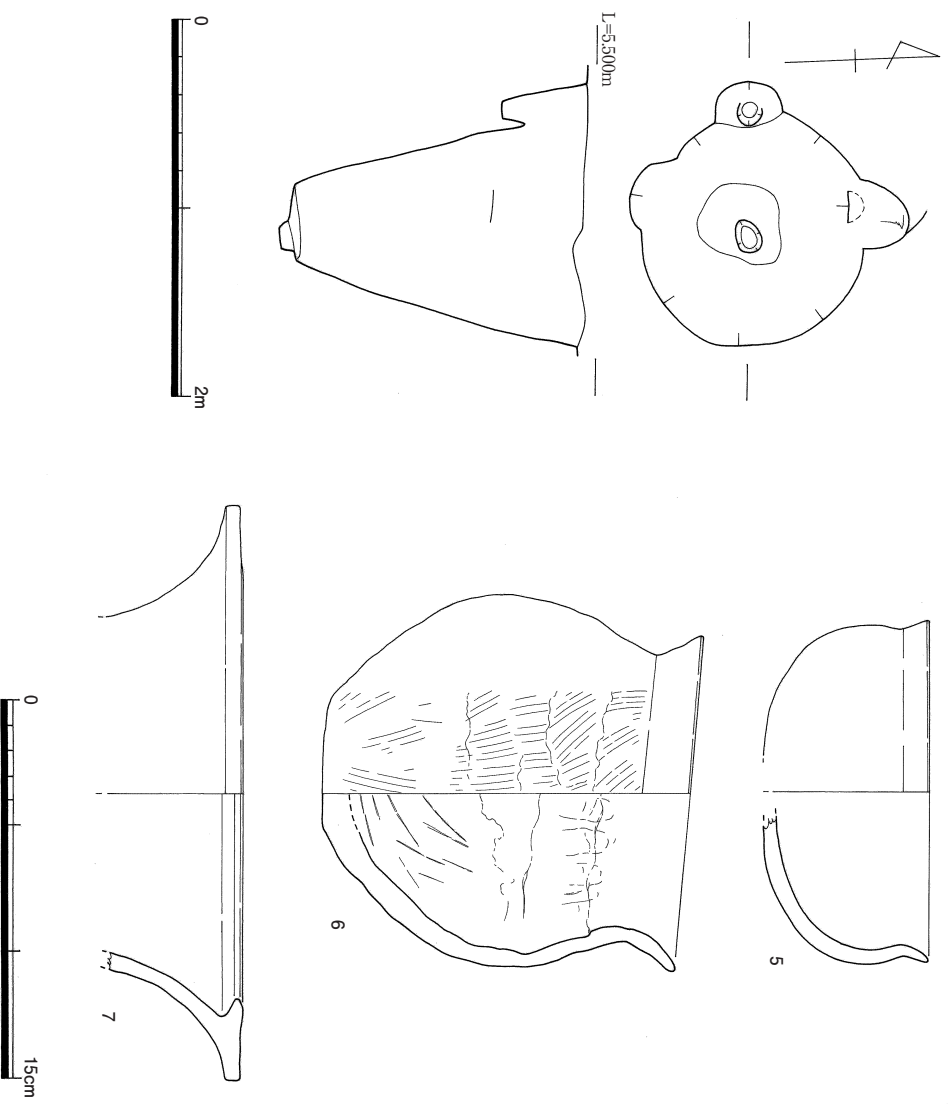


図8 SE02および出土遺物実測図 (S=1/40、1/3)

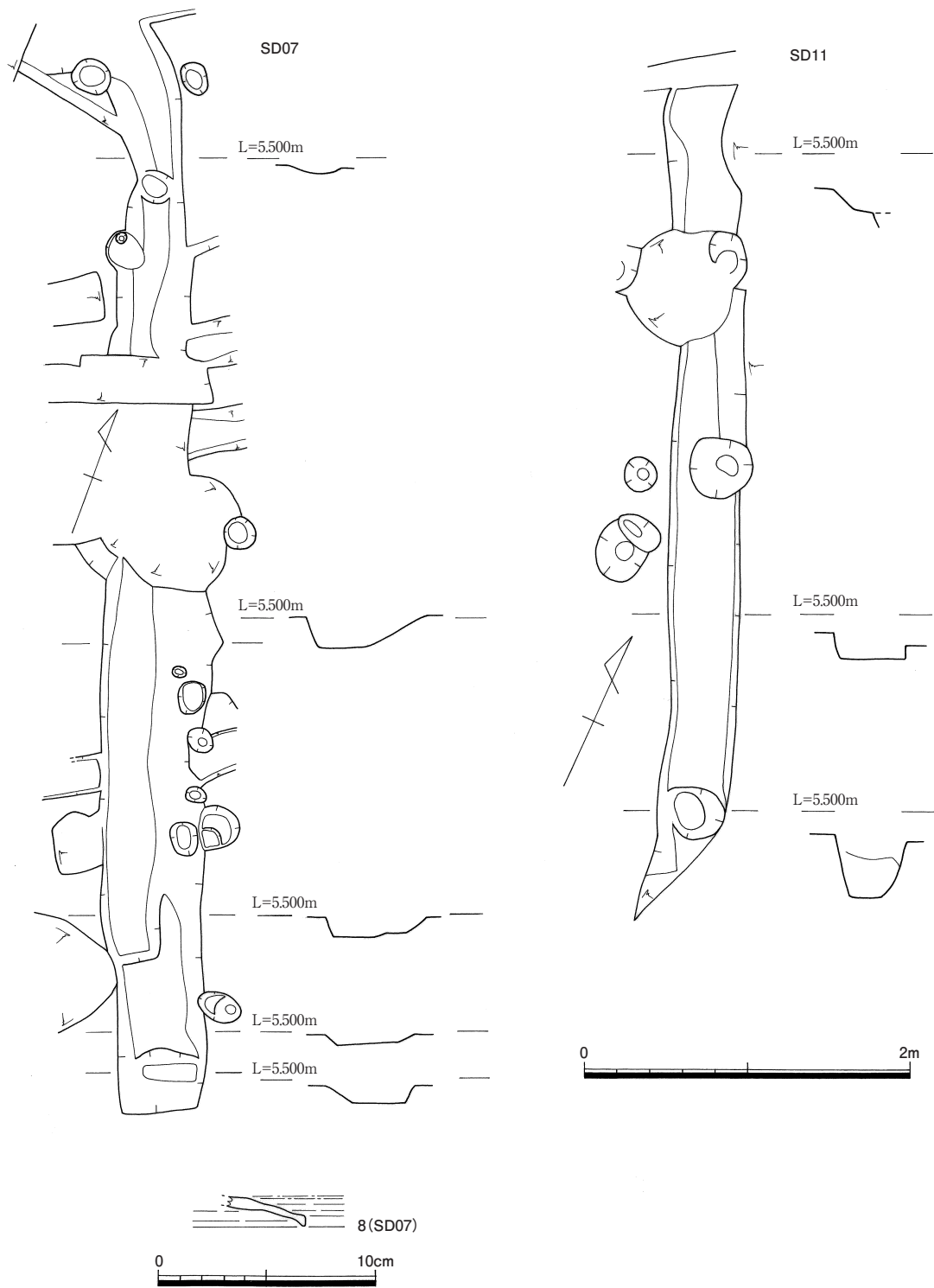


図9 SD07・11および出土遺物実測図 (S = 1 / 40、1 / 3)

出土遺物 (図9、図版10)

8は須恵器の杯蓋である。灰~にぶい黄橙色を呈し、内外面は回転で調整で、外面の一部に回転ヘラ削り痕がある。

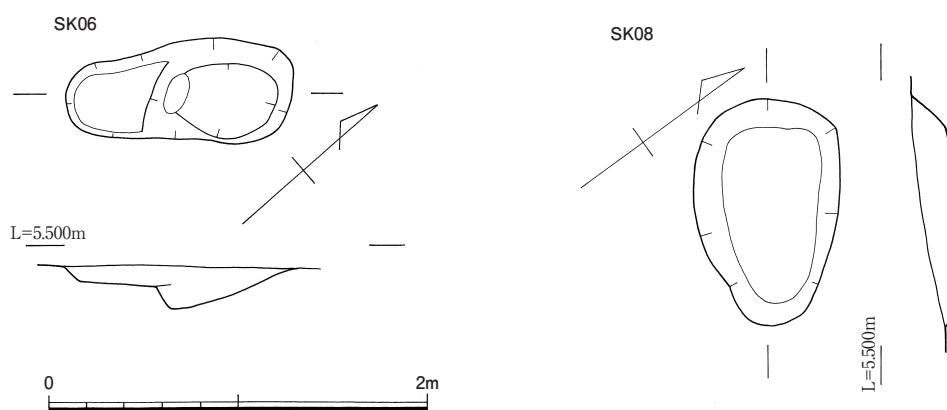


図10 SK06・08実測図 (S = 1 / 40)

SD11 (図9、図版6)

2区西部隅で検出した。検出長5m、深さ0.1m、南東から北西に走る。

土坑

SK06 (図10、図版6)

1区中央、SC01の北側で検出した。1.2×0.5mの楕円形で、深さ0.22mである。

SK08 (図10、図版7)

1区北部で検出した。1.2×0.76mの楕円形で、深さ0.2mである。

掘立柱建物

SB10 (図11、図版7)

1区南西部、SD07の東側で検出した。東西2間、南北2間以上である。ピットは径40~55cm、深さ25~55cmである。建物主軸は磁北に対し、24°西に傾いている。

SB12 (図11、図版8)

2区北西部で検出した。東西2間、南北4間である。ピットは径30~40cm、深さ30~50cmである。北西隅部は攪乱により失われたか、調査区外にあるものとみられる。建物主軸は磁北に対し、8°東に傾いている。

ピットおよびその他出土の遺物 (図12・13、図版10)

9~13は弥生土器の甕である。14・15は須恵器片である。16は磨製石斧である。残存長12.2cm、幅7.0cm、厚さ4.0cm、重さ555.0g。1区SP28出土。17は猿形の土製品である。高さ7.4cm、幅4.8cm、奥行き5.6cm、重さ114.0g。にぶい褐色を呈し、胎土・焼成は精良、正面で子供を両手で抱える姿が表現されている。

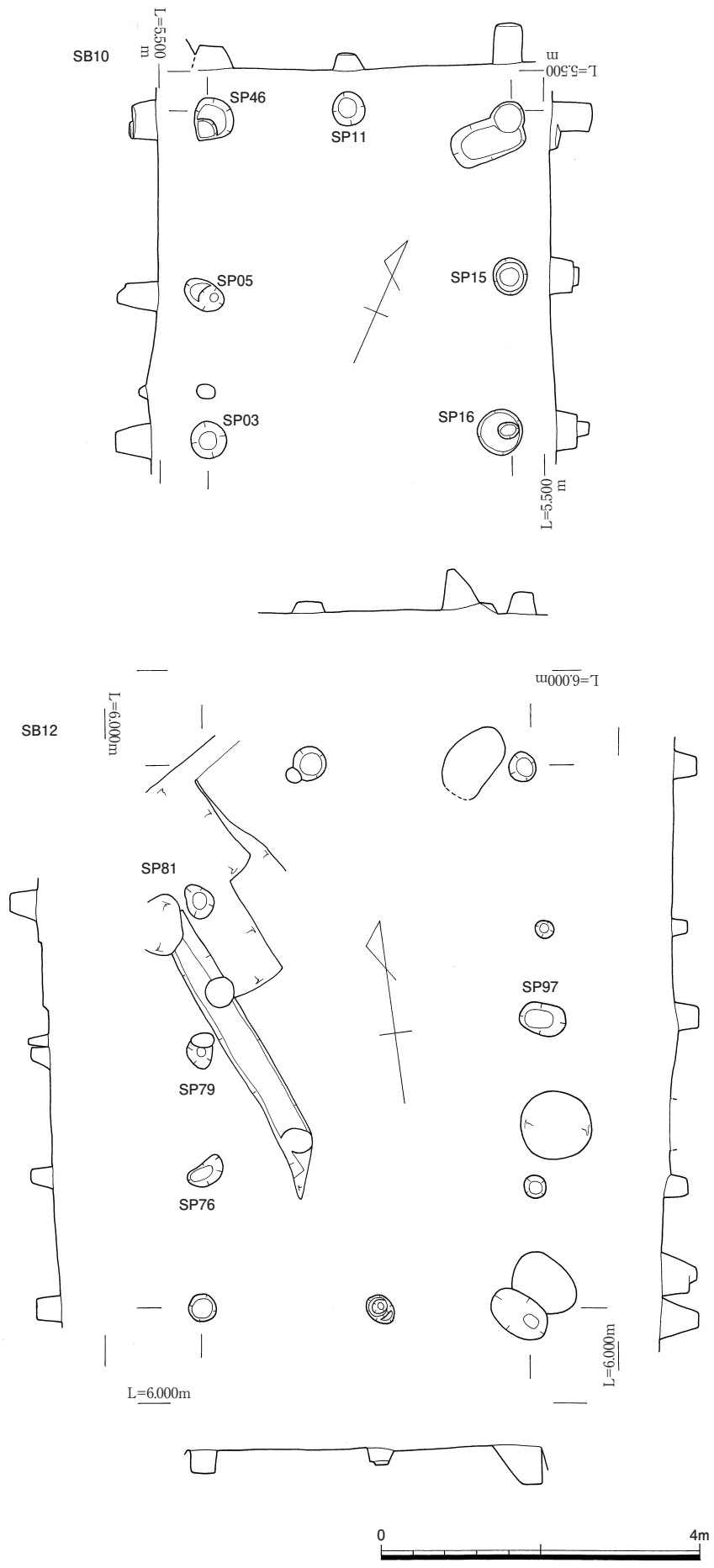


图11 SB10・12実測図 (S = 1 / 80)

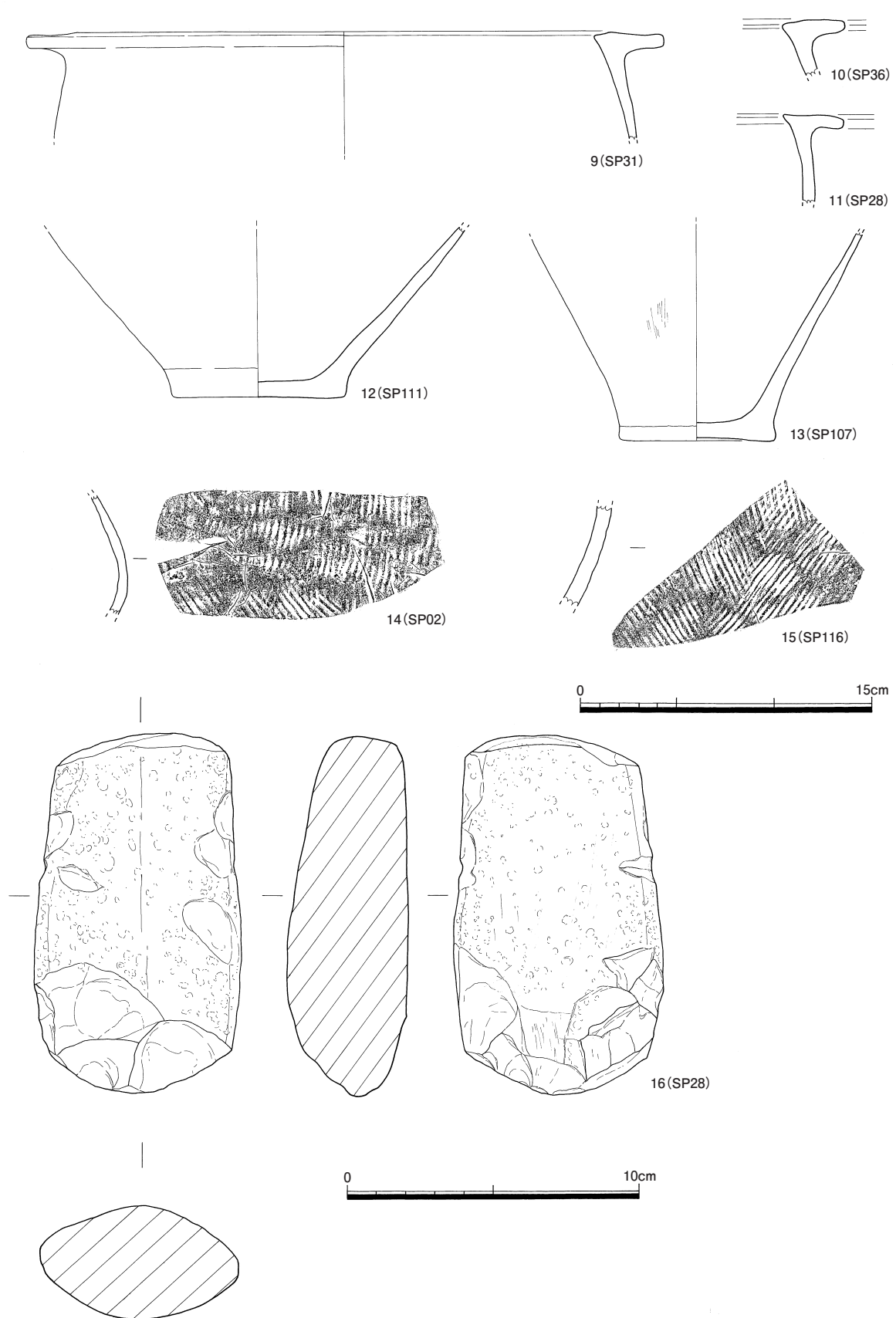


図12 ピット出土遺物実測図 (S = 1 / 3、1 / 2)

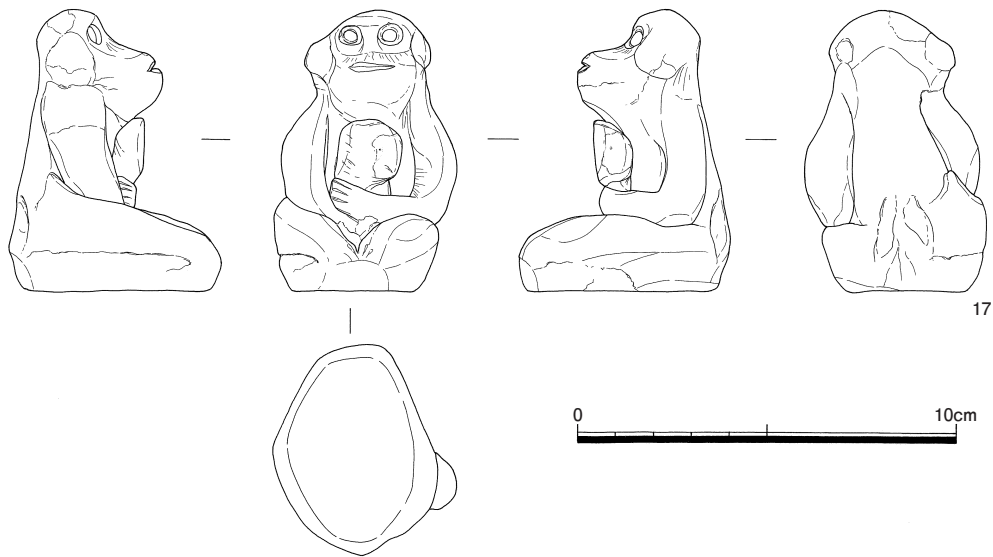


図13 かく乱出土遺物実測図 (S = 1 / 2)

3 まとめ

最後に今回の調査成果について、簡略ではあるがまとめておきたい。今回の調査区内は、既存建物の基礎や重機の爪痕など攪乱が全体的に広がっており、遺構面の状態は決して良いものではなかった。だがその中で調査区内の西側に弥生時代を中心とする遺構が残存しており、様相が明確となった。

近隣の調査では弥生時代前期の貯蔵穴群が検出されており、同時期の集落の広がりが見られるが、今回の調査ではそこまでさかのぼる遺構・遺物は確認されなかった。

今回の調査における最古の遺構は甕棺墓ST05である。金海式甕棺を埋置しており、弥生時代中期初頭に属す。今回の調査では攪乱が激しく、検出した甕棺墓はこの1基のみであった。

国史跡指定地内の8次・72次調査地点でも、同時期の甕棺墓が検出されているが、遺構の図・写真が提示されておらず詳細は不明である。甕棺墓は群を成すことがあるため、本来は周囲にあった可能性もある。

調査地点近隣では、60次調査で弥生中期前半～中葉の甕棺墓7基が検出されており、一帯は一時期遺跡縁辺に位置する墓域であったようである。

その後、弥生時代中期後半～後期末にかけては方形の竪穴建物や井戸が造られ、集落域と変化している。

掘立柱建物は2棟復元した。まだ復元できそうではあるが、削平のためか必要な所に柱穴が検出されなかったり、配列がいびつであったりするため、復元を見送った所もある。出土遺物は土器の細片で、時期の絞り込みには不適である。建物主軸が40°～50°東に傾く那津官家とされる倉庫群に対し、今回検出した建物は異なっており、建物の年代が違うものとみられる。

地形については、東側の春住小学校に向かって一段下がっている。春住小学校内の試掘調査により南北方向の河川があることが判明しており、台地の落ちに近づいているものとみられる。ただ北西方向については、鳥栖ロームの台地が続いており、落ちは認められなかった。

今回の調査により、遺跡の最端部の様相を明らかにする資料を加えることができた。周辺域における今後の調査成果に期待したい。

図版 1



1区全景（南西から）



2区全景（南西から）

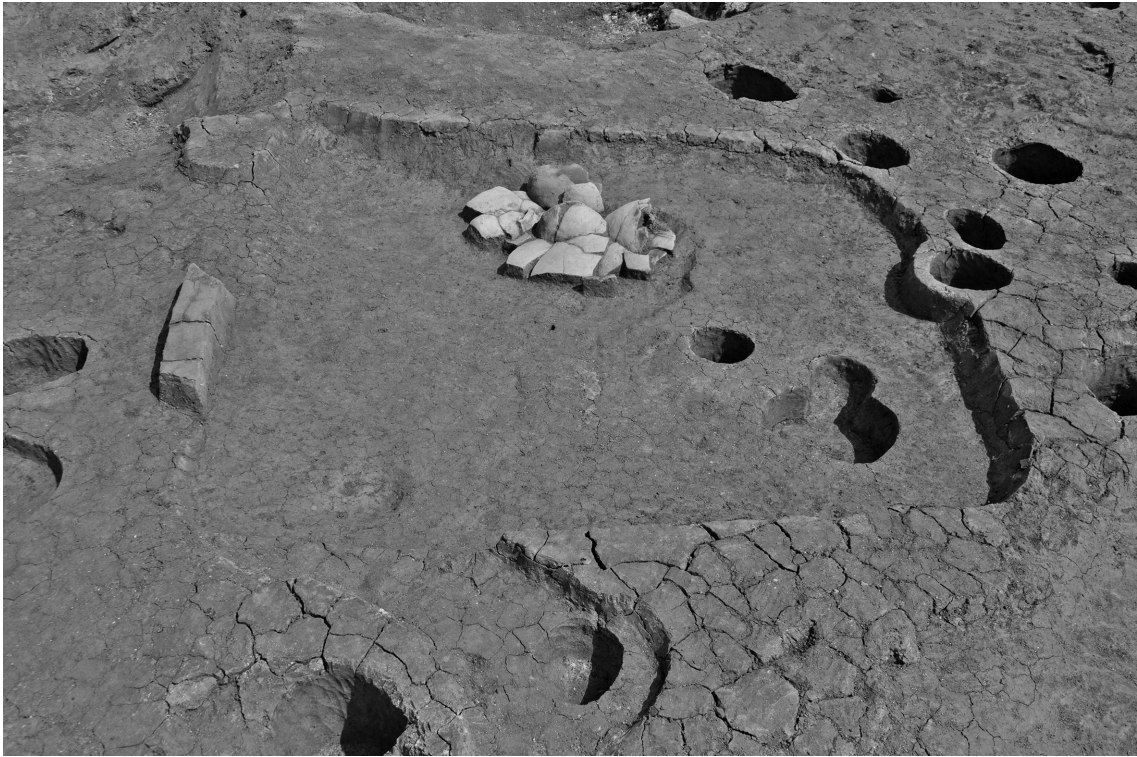


1区 ST05 (東から)



1区 ST05 (北から)

図版 3



1区 SC01 (北西から)



1区 SC01 遺物出土状況 (北西から)



1区 SC03 (南から)



1区 SC04 (西から)

図版 5



1区 SE02 (北西から)



1区 SD07 (北から)

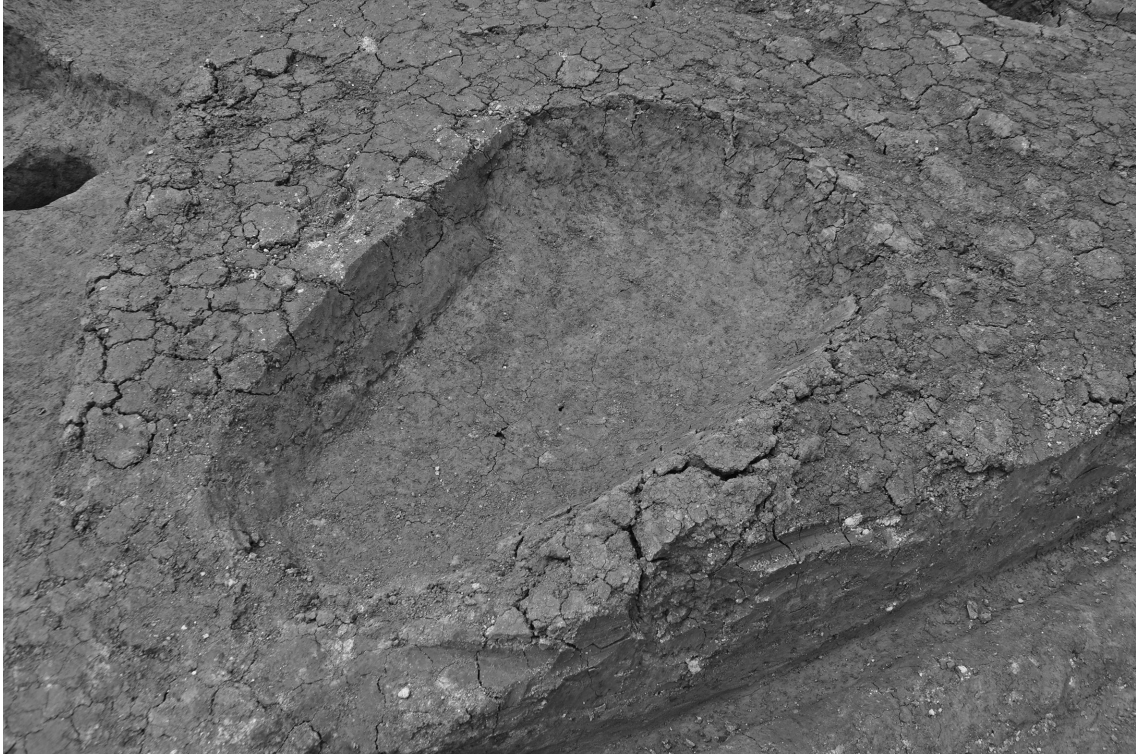


2区 SD11 (北から)



1区 SK06 (北東から)

図版 7



2区 SK08 (北東から)



1区 SB10 (南西から)

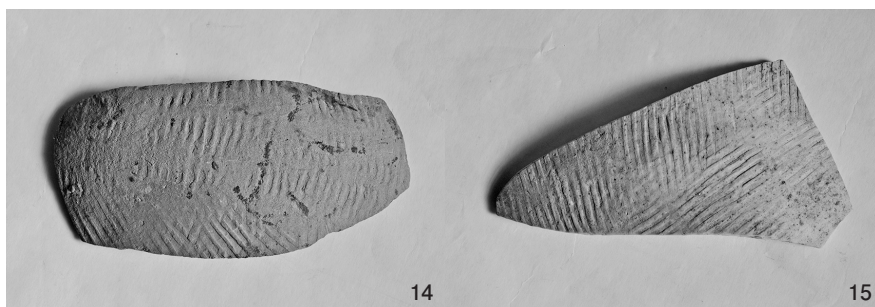
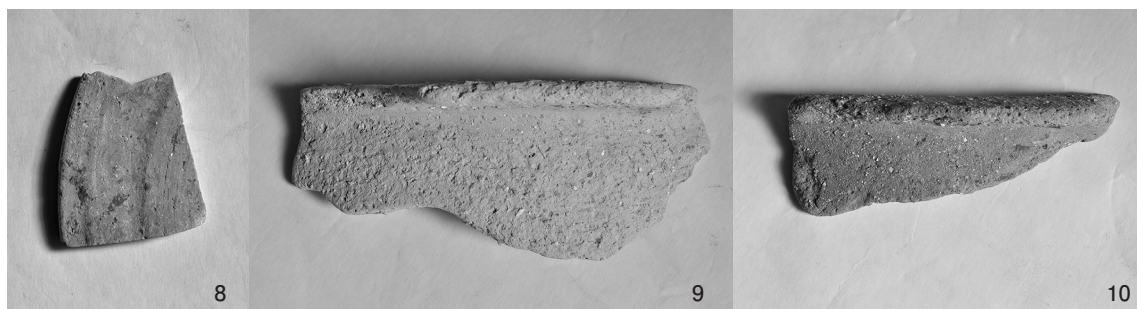


2区 SB12 (南から)

图版 9



出土遺物 1



出土遺物 2

報告書抄録

ふりがな	ひえ							
書名	比恵88							
副書名	比恵遺跡群第151次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第1401集							
編著者名	木下博文							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1							
発行年月日	2020年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ひえいせきぐん 比恵遺跡群 第151次	ふくおかしはかたく 福岡市博多区 はかたえきみなみ 博多駅南 5丁目62-3他15筆	40132	0127	33度 34分 43.80秒	130度 25分 32.46秒	20180312 ～ 20180528	730	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
比恵遺跡群 第151次	集落跡	弥生～中世	甕棺墓、竪穴建物、井戸、掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、須恵器				
要 約	<p>比恵遺跡群は御笠川と那珂川に挟まれた標高5～8mの低位段丘上に立地する集落遺跡である。今回の調査地点は遺跡の北西端、『日本書紀』にみえる那津官家と推定される国史跡指定地の北西に位置する。現況で標高6m弱である。現地表下25～40cmの烏栖ローム層上面で遺構を検出した。検出遺構は弥生中期初頭の甕棺墓1、弥生中期後半～後期末の方形竪穴建物3、井戸1、掘立柱建物、溝2、土坑、柱穴である。</p>							

比恵 88

－比恵遺跡群第151次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1401集

2020（令和2）年3月25日

発行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株式会社 博多印刷

〒812-0028 福岡市博多区須崎町8-5